調査報告

福建省窯址調査記

徳　留　大　輔※

実施日　2014年2月19日～23日
参加者　藪　敏裕（岩手大学平泉文化研究センター）
　　徳留大輔（岩手大学平泉文化研究センター）
　　劉　海宇（岩手大学平泉文化研究センター）

2014年２月19日（水）

７：15に桐丘荘で合流し、盛岡駅へ移動。その後、８時前の新幹線にのり東京駅経由で羽田空港へ移動。その後、13：30発の航空機で上海虹橋空港１号楼到着後、２号楼へ移動。虹橋空港の規模の大きさに改めて気づく。虹橋空港で早めの夕食をとり、出発時間をまつ。福州行きの航空機の出発が30分程度遅れ、19：10に福州へ向けて飛び立つ。福州空港には21：00に着。遅い時間にも関わらず空港には、共同研究者の福建省文物考古研究所副所長の羊澤林さんと宋逢勃さんが出迎えに来てくださり、宋さんの運転で福州市内の西湖濱館へ。ホテルには22時頃の到着であったが、共同研究者で福建省文物考古研究所の前所長で研究員の栗建安夫妻も出迎えてくださっていた。明日からの協議・調査がうまくいくようお互いに祈願して別れた。

2月20日（木）

８：40に羊さんがホテルに迎えに来てくださり、研究所まで徒歩で移動した。研究所はホテルの前に広がる西湖の中に浮かぶ島に立地しており、周辺は公園になっている（写真２）。公園には朝の散歩や太極拳などを楽しむ福州市民が多く見られた。天気も良く、空も澄んでいた。羊さんの話によると、中国国内外で話題のPM2.5による大気汚染は、中国国内の中において福州は極端にひどいわけでなく、比較的良好であるとのことであった。

公園を歩いて10分ほどで研究所に到着。福建省文物考古研究所は福建博物院の下部機関であり、博物院と研究所は同じ敷地内にある（写真１）。2013年に研究所の事務室・研究室は別棟に引っ越ししているが、まだその途中とのことであった。

到着後、間もなく藪センター長が、研究所の楼建龍副所長、羊副所長に共同研究の目的・意義・方法などについて説明を行った。福建省産の白磁などは平泉をはじめ、日本各地でも出土しており、当地の研究者と共通の目的をもって研究を進めることは非常に意義のあることである。２人の副所長も、とくに当センターが所有する蛍光Ｘ線分析には興味をもっていただいており、協力をいただけ

※　公益財団法人　出光美術館、岩手大学平泉文化研究センター

ることになった。早速、１ヶ月後の３月に最初の調査を行うことで合意した。

協議終了後、福建博物院にて常設展示の福建通史展、福建省窯址展、さらには特別展の海のシルクロード展を視察した。

視察終了後、栗さん夫妻、羊さん、宋さんと研究所近くの湖南料理のお店で昼食をとる。味付けは辛め。

昼食後は宋逢勃さんの運転で福州市博物館を視察。ちょうど２月末で終了する展覧会「福州市地鉄屏山坦考古発掘成果展」を視察。この展覧会は、福州市内で建設中の地下鉄工事に伴う発掘成果展であり、新石器時代から近代までの膨大な量の出土品のうちの典型的な考古遺物や比較的珍しい器物が紹介されていた。陶磁器に着目すると、福州市内で出土しているのはやはり閩江流域で焼成された製品が目立つが、中には浙江省の龍泉窯青磁なども流通・消費されていることが分かる。また大海茶入など日本の茶の湯とも密接に関連する洪塘窯の褐釉陶器や建窯の建盞なども展示されていた。そのほか同館では福州市内の歴史も考古資料を中心に紹介されている。

特別展は福州脱胎漆器展が開催されており、その技術の高さに驚かされた次第である。閉館時間ぎりぎりまで展覧会を満喫し、本日の協議および調査視察を終えた。

２月21日（金）

21日・22日は窯址の踏査である。福建産の陶磁器は日本に数多く輸出されているが、今回は平泉から出土していると思われる閩清義窯と福州宦渓窯を踏査することにした。

本日は8：30に宋さんに迎えにきていただき、義窯へ向かった。

10：00頃に閩清博物館へ。博物館には数多くの閩清窯の製品が展示紹介されている。それぞれの展示品には年代が記されておらず、また時代順に展示されている訳ではないので、初めて閩清窯の製品を見る人にとってはやや戸惑う所もあるが、鉢、碗、水注などの製品のほか、窯道具も一緒に紹介されており、焼成技法も理解できる展示となっている。12世紀代の劃花文の鉢や水注、四耳壺などは平泉で出土する物にやはり類似している印象を受けた。また倣龍泉窯の製品も見ることができた。とくに15世紀代の剣先蓮弁文の碗も見ることができたことはちょっとした驚きであった。

11：30に閩清博物館の館長ら３名も一緒に閩清窯へ移動。途中、館長の高校生の時の同級生が開いているお店で昼食をとる。閩江でとれる魚や付近でとれる山菜を楽しんだ。食事は非常においしかったのであるが、盛岡から南下してきた我々にとっては、屋内にセントラルヒーターがない南方の地域は、予想以上に寒く、食事の準備が出来るまでは、屋外の陽があたる場所で鉄観音を飲みながら体を温めていた。

昼食後、車で移動すること30分。

東橋鎮に入る。だいぶ標高の高い地点まで上がってきた。丘陵を車で上がっていくが、斜面の下には閩江の支流である安仁渓が流れている。閩清義窯上窯崗地点に到着（写真３）。昨年までは何もない丘陵地であったが、現在は養鶏場ができており、また窯址が存在していた地点も残念ながらかなりの削平を受けていた。むき出しになった丘には白磁や匣鉢、塾餅などの窯道具が露出している（写真４）。白磁の多くは鉢や皿類が多い。鉢類は口縁部が外反し、高台が高い、所謂太宰府分類の白磁碗２類や玉縁状の口縁部を呈する５類などが目についた。また見込み部を蛇の目状に釉剥ぎしている鉢も見られた。

次に踏査を行ったのは下窯崗地点である。ここは龍窯の保存状況が良好で窯構造を理解することに役立つことからも見学を行った。時代は窯の周辺に散布している白磁鉢片から元時代のものと想定さ

れている。

窯体は２基確認された。そのうち一つは、天井も残っている。窯の中には製品が入っていないＶ字形を呈する匣鉢が積み重ねられていた。匣鉢を専用に焼造していた部分であったのであろうか。もう一基は、窯壁は匣鉢を積み重ねて窯壁を作る構造の龍窯である。残念ながら天井は崩れていた。２基の龍窯ともに急勾配の傾斜に築かれている。少なくとも後者の窯は半地下式状の龍窯であり、窯の保護壁は看守されなかった。考古研究所の羊さんによると、この２基の窯は近い将来発掘調査を予定しているとのことであった。

最後に閩清窯址の文物保護単位を示す石碑を確認し、本日の踏査を無事におえて、18：30頃に福州へ到着した。

２月22日（土）

８：30に栗建安さんと宋さんに迎えに来ていただき、連江浦口窯へ向かった。浦口窯も昨日の義窯同様に数多くの白磁さらには青磁を焼成している。

高速道路に乗り、窯址についたのは9：30頃であった（写真５・６）。新しく道が敷設されたことにより窯址はかなり削平を受けていた。もともと窯址があった丘陵のど真ん中に道路が作られていた。

12世紀代の白磁、また龍泉窯青磁を模倣した南宋末から元代頃の発色のわるい劃花文や連弁文青磁も数多く見られた。匣鉢の中に、青磁と黒釉陶器があわせて焼造されている事例がわかる破片も見られた。

途中、車のバッテリーがあがってしまうアクシデントがあったが、無事に次の地点へ移動した。金錦寺地点である。寺の裏山に窯址および物原の遺構があることが確認されていたが､今回の調査では、裏山は削られ、あらたな廟が建築中であり、以前以上に削平が進んでいた。陶磁器の破片を見ると、先ほどの地点とほぼ同時代の破片が散布していた。

14：00頃、廟の近くで遅めの昼食をとり、宦渓窯へ移動した。

宦渓窯は平泉で出土している水注や四耳壺の破片を確認した（写真７・８）。特に水注の頸部に付ける装飾で「吉」字が入ったものも確認できた。なお同様のものが平泉でも出土している。また閩清義窯と類似した碗の製品も見られた。

栗先生の話では2012年の踏査時に完形の水注を２点、採集したとのことである。現在、その地点はアヒルを飼っており今回はその地点の調査はできなかった。

以上、平泉で出土する福建産陶磁器を焼造したと思われる一部の窯址の踏査を終えた。今後は実際に、出土資料を蛍光Ｘ線分析を通して産地推定に関する研究を行う予定である。

写真１　福建博物院外観

写真２　福州市西湖公園

写真３　閩清義窯遺跡

写真４　閩清義窯の物原

写真５　連江浦口窯の物原

写真６　連江浦口窯金錦寺地点

写真７　宦渓窯水注「吉」字破片

写真８　宦渓窯遺跡保護碑